様式９（Ａ４判縦、３０００字以内）

博士論文審査要旨

論文審査担当者

主査　明星大学　准教授 竹内 康二
委員　明星大学　教授　林　幹也
委員　明星大学　助教　丹野　貴行
委員　慶應義塾大学　教授　山本淳一

申請者氏名　　塚本　匡
論 文 題 目　労力とそれに関連する諸変数が刺激の価値に及ぼす影響
－試行内対比効果の生起条件に関する実験的検討－

（論文審査の結果の内容）

研究構成

本研究論文は総論と実験的研究の二部により構成されている。総論では本研究のテーマ（労力と価値）に直接関連する領域の研究小史をまとめ、試行内対比モデル（within-trial contrast）を理論的枠組みとした追加研究の必要性を指摘している。実験的研究では著者自身によって計画された研究をもとに、研究１～３までを詳細にまとめている。研究１は、静的な反応（計時行動）のパフォーマンス（誤反応率）を操作することで、刺激選好（試行内対比効果）が得られるかどうかを検証した。その結果、計時行動においても仮説通りの試行内対比効果を示すことができた。研究２では、課題に遅延時間を挿入することで、先行する時間が後続する刺激に対する選好に及ぼす効果を検証した。その結果、時間の影響を見られなかったため、研究1で得られた選好が時間というよりも労力や課題の難易度によるものだったことを示唆している。研究３では、潜在的測度であるIAT（Implicit Association Test）を新たにテストに加えることで、従来から採用されてきた刺激の二者択一の選択テストにおける選好との間に収束的な結果が得られるかどうかを検証した。しかしながら、IATでは、試行内対比モデルを支持するような刺激間の連合を示すことができなかった。

総合考察では以下のような結論が得られた。（1）先行課題中のパフォーマンスが試行内対比効果の予測に関する有用な情報を提供してくれることが明らかになった。（2）身体の移動を伴わない静的な反応を要求したとしても、用意した課題に後続する刺激の価値を変化させる機能があれば選好は生じることが示された。（3）ヒト（主に大学生）を対象とした場合、同時弁別課題と単一刺激の提示のどちらの手続きを用いたとしても、相対的に高労力な事象に後続する刺激が選好された。ただし、その選好の強さは同時弁別課題を用いた方が大きくなることが明らかになった。（4）本研究で用いたIAT では、選択テストとの間に収束的な結果を得ることができず、また、このモデルを支持する行動データを観察することもできなかった。

評価できる点

本研究は「ヒトは労力（effort）をかけて手に入れたもの対して相対的に高い価値をおくことがある」ことを説明する理論（試行内対比モデル）の実験的検証を行った。このテーマを検討することには行動科学的および社会科学的にも学術的意義が認められる。また、総論部ではこのテーマに関する国内外の先行研究について十分な調査や情報収集が行われ、かつその整理と分析が十分に行われ、適切な研究課題が設定されていた。

設定された研究課題を検討するための研究の方法は慎重に計画された上で適切に実施されており、得られたデータの取り扱いや統計などによる分析結果の解釈は正確かつ緻密に行われていた。また、データの分析から結果の解釈、そして考察に至る論理展開には整合性・一貫性があり、結論が明確に導き出されていた。

本研究の価値や独自性は、先行研究での追試結果が不安定である試行内対比効果を、計時行動という静的な反応を求めることによって、安定的に再現させることができたことにある。また、このテーマではこれまで扱われてこなかった潜在的測度を利用して試行内対比効果を検討したことである。本研究が取り扱った「ヒトがある刺激を好み選ぶことのメカニズム」は、心理学のみならず行動経済学や応用行動分析学の領域において大変重要なテーマであり、本研究の知見がそうした分野の発展に貢献すると思われる。

課題であった点

3つの実験研究間の条件統制に一部合理性を欠いていることを否めない。労力と難易度と時間の影響を充分に分離できていないと思われる箇所がある。また、不快といった曖昧な概念を用いる試行内対比モデルに説明を求めるだけでなく、行動分析学的説明を丁寧に追及することも必要であったと思われる。

しかし、上記のような課題について申請者は十分理解し、既にそれらを解決するための追加研究も実施中であること、そして限られた期間の中で実施した一連の研究であることを考慮すれば申請者の努力は高く評価できるため、研究の価値を損なうものではない。

以上により、本研究は博士（心理学）の学位を授与するに十分価値あるものと認

める。

（試験および試問の結果の要旨）

口頭試問においては、主に以下の点について論文審査担当者から質問や指摘があった。①課題の難易度や遅延時間の影響を不快であったという同語反復的な解釈にならないよう不快という言葉の使い方を慎重に定義する必要がある。②試行内対比効果が不快からの回復というメカニズムに依拠しているならレスポンデント条件づけの枠組みから分析することを検討してはどうか。③「苦労して手に入れたものを好む」といった現象の説明を目的とする背景であったのに、手に入れた報酬や餌そのものではなく、苦労して手に入れた後に提示された刺激を選好するかどうかといった議論にすり替わっている印象がある。なぜそのような手続きになったのか。④課題の難易度を独立変数として操作することにした理由が論文の中で明確でないが、それはなぜか。⑤複雑な変数に制御されているヒトの研究では、より個体差に注目して変数を検討する視点も必要と思われるがどうか。

こうした質問に対する申請者の回答は的確かつ丁寧なもので、論文審査担当者の質問内容や質問意図を十分に理解して本研究の課題を整理できていることが伺えた。また、今後の課題として上記の必要性について発展的に検討し、追加の実験を行っていく予定であるとの回答もあった。

上述の論文審査と口頭試問の結果を慎重に審査した結果、合格と判定した。